

常滑市民病院だより

発行者：病院長 鈴木 勝一
編集：病院広報委員会
第55号
2011年3月1日発行



ICLS講習会

— 第55号の内容 —

- * 「看護部長就任挨拶」
看護部長 久米 淳子
- * 『市民の手による、市民がつくる市民病院』をめざして
事務局長 梅原 啓三
- * 「入院時に持参するお薬の話」
薬剤師 山中 友紀子
- * 「常滑市民病院ICLS講習会」
看護師長 神田 すみゑ
- * 「RFA【ラジオ波焼灼療法】
はしうしやくうほう
臨床工学室 石川 健太郎

「看護部長就任挨拶」

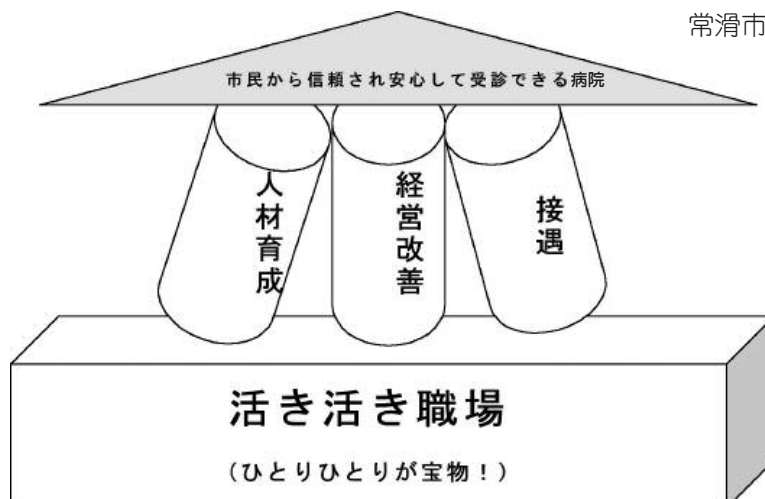
看護部長 久米 淳子

1月より看護部長に就任致しました。力不足ゆえ、周りの方々に助けられ、支えられながら、悪戦苦闘中です。新病院建設という旗があがっています。私達病院職員には、その旗を目指し成果を上げることが求められています。財政難の常滑市の状況から察し、険しい道のりになるでしょう。それでも、常滑の未来のためにどんな街づくりをしていくべきか、何を残し、何を手放すべきを見誤らず、ビジョンと覚悟を持ち、前進していく所存です。どんな険しい道も目指す道（旗）が明確であれば、皆で力を合わせ助け合えば必ず辿り着けると信じています。常滑市民病院は、地域住民のための病院です。地域の人たちに愛され、必要とされなくてはなりません。同時に財務的貢献も必須です。経営の安定化を図らなければ、継続はあり

得ません。私には看護部代表として、病院の目指すところ、看護部の理念・目標を看護部全体に浸透させる責務があります。まだまだ未熟ですが、人を動かせる「伝える力」を磨いていきたいと思っています。看護部目標は、下図に示される通り、生き生き職場を土台に、人材育成・経営改善・接遇の三本柱を立てています。目標は、人が生き活きと働くため、行動するためにあります。ひとりひとりが病院の顔であることを自覚し、ひとりひとりが行動を起こせば、必ず成果はあります。

地域の方々に必要とされ安心して受診して頂けるような病院を目指して、職員一丸となって努力していきます。これからもよろしくお願いします。

常滑市民病院 看護部目標概念図



『市民の手による、市民がつくる市民病院』をめざして

事務局長 梅原 啓三

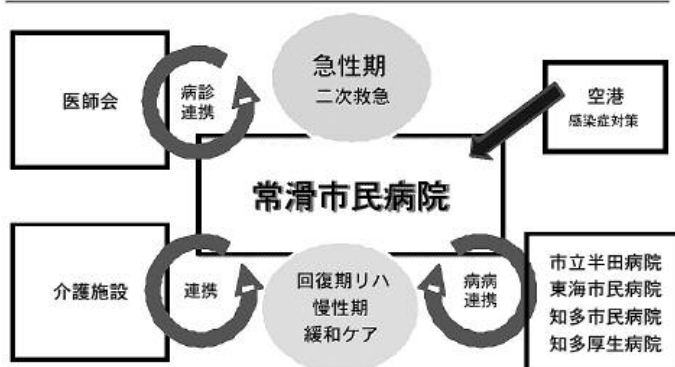
昨年12月、『行財政再生プラン2011』の中で、市長は「財政は危機的な状況となっているが、まちの魅力を高めていく取組みは必要であり、市民病院の移転新築については、平成27年度の開院を目指す」とことを表明しました。患者さんからは、「新しい病院を楽しみにしています」とか、「どんな病院になるのですか」などの声をいただいております。

常滑市民病院は、昭和34年5月の開院以来、市内唯一の病院（入院施設）として、市民のために総合的な医療を提供し、地域の中核病院として重要な役割を担ってきています。患者の8割が常滑市民という市民の利用率が非常に高く、また、常滑市は県内他市と比較しても高齢化率が高いまちです。こうしたまちの特性を十分考慮しながら、市民にとって必要な病院、まちづくりの核となる病院を目指していきたくと考えております。

建設場所は現病院の東に位置する「飛香台」とし、市内の開業医さんとの連携、周辺病院との連携、介護施設との連携など地域の医療連携を重視した病床数250床程度（急性期病床210床程度、回復期リハビリ等病床40床程度）の病院を考えております。

新病院に向けてスタートを切ったばかりですが、まずは、どんな病院にするかを議論する「基本構想策定委員会」を立ち上げ、基本的な考え方を定めていきます。その議論をしていく過程で、シンポジウムなど患者さんや市民の皆さんの声をお聞きする場を設け、皆さんの知恵と力を結集した『市民の手による、市民がつくる市民病院』にしていきたいと思っておりますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

新病院のイメージ



「入院時に持参するお薬の話」

薬剤師 山中 友紀子

入院される患者様の多くは薬を飲んでいますが、中には当院で処方された薬以外に、別の診療所や病院で処方された薬を服用している方もいます。

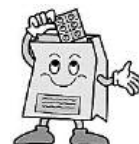
患者様が入院される場合に、自宅からお持ち頂く現在服用中・使用中の薬の事を「持参薬」といいます。持参薬には、他科や他院などから処方されている薬はもちろん、風邪薬・頭痛薬などの一般薬、サプリメントも含まれます。また飲み薬だけでなく、点眼薬、貼り薬、塗り薬などの外用薬、注射薬などすべての薬のことを言います。

持参薬は多種多様です。患者様の持参薬が何の薬であるかを医師・薬剤師・看護師が、早く正確に把握することは、入院後の治療をより適切に行う上で非常に重要なことです。



★患者様にとっての利点

- ① 医師の判断により、自宅で服用している薬が入院中にも使用できる場合があります。
- ② 持参薬と、これから治療のために処方される薬との飲み合わせや重複投与が避けられます。
- ③ 手術や検査などの前に中止しなければならない薬がチェックされます。
- ④ 健康食品やサプリメントと薬との飲み合わせについてチェックされます。
- ⑤ 患者様が普段飲んでいる薬について薬剤師に説明を受ける事が出来ます。



入院時には持参薬をお持ちくださるようお願いいたします。また薬の袋や薬の説明書、お薬手帳なども大切な情報源となりますので、あわせてお持ちください。

「常滑市民病院」ICLS講習会

看護師長 神田 すみゑ

皆さんAEDをご存知ですよ。今では、学校・体育館・空港・公共施設などに設置されています。BLS・AEDの一次救命処置は一般市民にも普及されており、市民の方々も目の前で急変した人達を救命する為、救命処置を学びいつでも実践できるように、あっちこっちで練習を盛んに行っております。

先日のセミナーで一般市民の方が「心臓突然死は他人事のように思っていたのですが、息子を亡くしてから『心肺蘇生とAEDの講習』を受け……父の急変時に助ける事ができました。一步踏み出す事は難しいが、勇気をもって迅速な一次救命処置で「救える命」があることを医療従事者の皆さんと共に伝え続けていきたい。」と言っていました。胸骨圧迫・AEDで助かり社会復帰できている方々は多数おります。

一般市民の方々が一次救命処置をしてくださり、その処置を引き継ぐ医療者側として2次救命処置を学び訓練しなければなりません。

そこで当院も、日本救急医学会ICLS認定コースを2008年に皆さんの協力のもと立ち上げることが出来ました。当院もこの講習会を行うことによって、入院患者様はもちろん院内に足を踏み入れた方々、院外の人々全ての方を対象としております。皆様の急変時に一刻も早く救命できるよう訓練しながらチーム医療を確立しております。

少しICLSについて説明します。ICLSコースの名称について「ICLS」とは「Immediate Cardiac Life Support」の頭文字を取った略語です。突然の心停止に出会った時にどのように対処すべきか、というコースの学習目標を端的に示しています。心停止はどの医療機関のどの部署においても起こりうるもので、いったん発生すれば蘇生を開始するまで少しの猶予もありません。まさに「Immediate(すぐに、間髪をおかない)」な処置が必要となるのです。心停止直後の処置には、あらゆる医療者がチームの一員として参加し、蘇生を行うことが求められています。ICLSコースでは、あらゆる医療者が身につけておくべき、蘇生の基本的事項を習得できるようにしています。ICLSコースとは医療従事者のための蘇生トレーニングコースです。心臓血管系の緊急病態のうち、特に「突然の心停止に対する最初の10分間の対応と適切なチーム蘇生」を習得することを目標としています。講義室での講義はほとんど行わず、実技実習を中心としたコースです。受講者は少人数のグループに分かれて実際に即したシミュレーション実習を繰り返し、約1日をかけて蘇生のために必要な技術や蘇生現場でのチーム医療を身につけます。身につける行動の目標は以下の通りです。

- ・ 蘇生を始める必要性を判断でき、行動に移すことができる
- ・ BLS(一次救命処置)に習熟する
- ・ AED(自動体外式除細動器)を安全に操作できる
- ・ 心停止時の4つの心電図波形を診断できる
- ・ 除細動の適応を判断できる
- ・ 電気ショックを安全かつ確実にこなすことができる
- ・ 状況と自分の技能に応じた気道管理法を選択し実施できる
- ・ 気道が確実に確保できているかどうかを判断できる
- ・ 状況に応じて適切な薬剤を適切な方法で投与できる
- ・ 治療可能な心停止の原因を知り、原因検索を行動にできる



【ICLSコースの認定基準】

「突然の心停止に対する最初の10分間の適切なチーム蘇生を習得すること」を学習目標に含む。

1. 実技を中心としたコースである。
2. スキルセッションと、シナリオセッションを含む。
3. 1グループ5～6名を標準とする。
4. 認定コースディレクターがコースディレクターとなり、コースの質を保証する。
5. 各ブースに1名以上の認定インストラクターがおり、各ブースの質を保証する。

毎回、コース開催時は申請して認定許可を頂いてから講習会を開催しております。ICLS委員会の委員長のDr 中山がディレクターも兼ねています。Dr 中山を中心に医師・看護師・検査技師・レントゲン技師・リハビリ技師・臨床工学技士・救急救命士の皆さんで受講生を12名受け付けながら、認定インストラクターのもと、蘇生のために必要な技術や蘇生現場でのチーム医療を身につけています。

今後も蘇生の心「行動する心・共有する心・やさしい心」を持ちながら、スタッフ一同講習会を続けていきたいと思っております。

「Radio Frequency Ablation: RFA【ラジオ波焼灼療法】」

は しょうしゃくりょう ほう
りんしょうこうがくしつ りんしょうこうがく ぎし 主任 石川 健太郎
臨床工学室 臨床工学技士

今回は常滑市民病院で行われている^{かんぞうがん しゅよう}肝臓癌（腫瘍）の新しい治療【ラジオ波焼灼療法】について市民の皆様を紹介したいと思います。（ぜひ読んでみてくださいね！）

【ラジオ波焼灼療法】は電子レンジが^{でんじ は}電磁波による熱エネルギーを利用して食品を加熱するようにラジオ波といわれる電磁波による熱エネルギーを利用して肝臓腫瘍組織を焼灼させる治療です。（電子レンジでチーンのイメージですね！）

【ラジオ波焼灼療法】は東京大学附属病院の^{しい な しゅういちろう}椎名 秀 一郎医師が世界一の治療数を誇っており、たびたびメディアに肝臓癌の最新治療また世界の名医として紹介されていますのですでにお知りになっている方もみえると思います。（日本の医療レベルは高いですね！）

わが常滑市民病院は知多半島で唯一このラジオ波焼灼装置を保有しており3名の医師が中心となりこの治療を行っております。（うちの病院もすごいですね！）

【ラジオ波焼灼療法】の良いところは手術でお腹を切って腫瘍を取り出さなくてもよい、出血がほとんどない、10分程度の短い時間で治療できる、痛くない、確実に腫瘍組織を焼灼できるなどの長所があります。冷却水を循環させながら行うので熱さもそれほどありません。（患者さんにやさしい治療ですよ！）

【ラジオ波焼灼療法】の実際では医師が^{ちゅうおん ぱ}超音波エコー装置を駆使しながら正確な技術で腫瘍に^{でんきよく}電極を刺します。臨床工学技士はラジオ波焼灼装置を操作し電極先端から出る電磁波の熱エネルギーを最適に調整し腫瘍を焼灼します。看護師は術中の専門的な看護を行っています。（熱くないですか？大丈夫ですか？なんてお話ししながらできますよ！）

わが常滑市民病院は医師を中心に臨床工学技士、看護師などのスペシャリストが連携してさまざまな医療を行っています。（みんな明るくがんばっています！）

建物はレトロな歴史的建造物ですが（自信をもって言います！）中身はどこの病院にも引けをとらない医療を行っています。

私たち臨床工学技士は病院の医療機器を取り扱う国家資格の専門家です。また機会があれば常滑市民病院自慢の医療機器を使用した最新医療を市民の皆さんに紹介していきたいと思います。

（それではまたの機会にお会いしましょう！ See you !）



治療中の様子



RFA装置を操作する臨床工学技士

編集後記

今年に入り寒い日が続きましたが、徐々に季節は温かい春を運んできています。人は勝手なもので、思い起こせば去年のあの暑い夏には、冬の寒さを心待ちに感じた時もありました。いずれにせよ日本は四季を感じながら生活できる良い国であるということでしょうか。さて、この病院便りも季刊で発行していましたが、今年から発行回数を年6回とし、病院を訪れる方々に各種情報の提供を行っていきます。病院便りで何か気づいたことや要望がございましたらお聞かせください。（編集担当）